

令和元年6月20日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02341

研究課題名(和文) 演劇とドラマトゥルギー テクスト、上演作品、劇場の見地から考察する新たな関係

研究課題名(英文) Theatre and Dramaturgy: New Relationship Considered from the Perspectives of Text, Performance and Theatre

研究代表者

藤井 慎太郎 (Fujii, Shintaro)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：10350365

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は現代演劇の理論と実践におけるドラマトゥルギーの今日的展開を論じるものである。3年間にわたった本研究は数多くの成果を生み出した。英語の単行本(共編著1件、分担執筆1件)、フランス語の演劇専門誌の共同編集1件(論文も発表)、日本語の単行本(分担執筆2件)および学会誌(特集の責任編集1件)を出版し、そのほか8本の論文を発表し、国際学会・シンポジウムにおいて計6本の研究発表を行った(うち英語で4本、日本語で2本)。実施した聞き取り調査のうち9本を紙面上ないしインターネット上で発表したほか、ドラマトゥルギーに関連する重要な文献5件について、解説を付した翻訳が刊行される予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においては、その成果の相当部分を活字出版や口頭発表によって公表・公開し、研究の果実を社会に還元することができた。そうした成果の中には、日本はもちろんのこと、英語圏やフランス語圏で発表されたものが数多く含まれ、特に、代表者が共同責任編集を務め、フランス語で刊行された演劇専門誌の日本特集号は、刊行以来とりわけ高い評価を受けた。これらはまた国外の研究者との協働の成果でもある。本研究はドラマトゥルギーの実践と理論の今日的展開を明らかにするだけでなく、それを介して国際的な学術交流、芸術交流の発展にも少なからず寄与することができたものと自負している。

研究成果の概要(英文)： This research project aimed at understanding and analyzing the 'dramaturgy' in contemporary performing arts both theoretically and practically. This three-year research project was highly successful and produced a good number of results which include (co-) editing of three collective publications (one in English, another in French and the other in Japanese) and participation in three collective publications as an author (one in English and two in Japanese), publication of eight articles, of nine interviews with theatre artists and administrators, and of five translations of theoretical writings related to dramaturgy, as well as presentations of six papers given orally at international academic meetings and symposia.

研究分野：演劇学、文化政策学

キーワード：演劇 劇場 観客 ドラマトゥルク ドラマトゥルギー 作品分析 文化政策

1. 研究開始当初の背景

今日の演劇研究において、ドラマトゥルギーをめぐる議論は世界的にきわめて活発であり、英語圏やフランス語圏では重要な著作・論文の刊行が相次いでいる。このように演出からドラマトゥルギーへと研究関心が拡大・移行し、ドラマトゥルギーが注目を集めている背景には、1) 1980年代以降にドラマトゥルク(演出家/振付家、劇場監督の知的・芸術的補佐役)の活動領域が大きく拡大したこと、2) 世界的に著名な演出家/振付家の創造活動をドラマトゥルクが支えてきたこと、3) ドラマトゥルクが自らを組織化し、フォーラム、シンポジウム、著作において熱心にその実践について語り、ドラマトゥルギーとドラマトゥルクに関する困難な理論化をあえて試みてきたことがある。

日本においてもドラマトゥルクを名乗って活動する者が増加し、ドラマトゥルクの存在は近年、注目を集め、議論や人材育成の対象となることも増え、2015年2月には日本ドラマトゥルク連絡会も発足した。一方、日本における貴重かつ希少な先行研究の一つである平田栄一朗『ドラマトゥルク』(2010)においても、ドラマトゥルギーはもっぱらドイツ(型)の劇場においてドラマトゥルクが所属する部署とその活動として位置づけられているが、実際にはドラマトゥルクとドラマトゥルギーの関係はもっと複雑なものである(たとえばドラマトゥルクのいないところにもドラマトゥルギーを読みとることは可能である)。日本では、現代におけるドラマトゥルギーに関する理論的議論は依然として充分になされているとはいえない状態であり、さらなる展開が待たれている。

研究代表者は、2013年度に自らが責任者となって、「新しい演劇人<ドラマトゥルク>養成プログラム」(早稲田大学文学部演劇映像コース)を実施し、日本においてドラマトゥルギーの理論と実践を結びつけることを試みた。そこで得られた知見と経験をもとに、2014年に「演劇とドラマトゥルギー 現代演劇におけるドラマトゥルギー概念の変容に関する一考察」という論文を執筆し、同内容をストラスブール大学での国際シンポジウムでフランス語で発表し、後に早稲田大学文学研究科紀要に日本語で発表した。本研究はそれらを出発点として、その延長線上に位置づけられるものである。

2. 研究の目的

ドラマトゥルギー概念・実践は、戯曲のドラマトゥルギー、すなわち「戯曲の構成/創作にあたっての原則、およびその技術」という古典的定義から出発しながら、近年ではテキストのみならず、上演作品の構成、演劇以外の舞台芸術作品、劇場の活動についてもドラマトゥルギーを問題にすることができるまでに、意味内容が拡大・多様化・複雑化している。今日のドラマトゥルギーの概念には1)「戯曲の構成/創作(composition)の技芸」(プチ・ロベール辞典)「劇作術」、2)「テキストから舞台への移行」(Bernard Dort)に関わる思考・実践、とりわけ現代では「パフォーマンスの構成を規定する技術/理論」(Marco De Marinis)「舞台作品の組織化・構造化の原則」、3)「劇場の(ドラマトゥルクが企画・実施する)活動、およびその原則」といった、重なり合いつつも異なる複数の意味が含まれているといえる。本研究は1)テキストのドラマトゥルギー、2)上演作品のドラマトゥルギー、3)劇場のドラマトゥルギーを研究対象として、ドラマトゥルギー概念・実践の歴史的変容を分析するとともに、今日の実践におけるドラマトゥルギーの特徴を理論的に考察することを目的とする。

3. 研究の方法

研究の方法を大きく述べると、以下の通りである。まず第一に、研究の基盤となる理論研究として、関連資料（主にフランス語・英語・日本語）を広く収集すると同時に、重要とされる著作の精読を進める。それと並行して、日本、およびヨーロッパと北米のフランス語圏（フランス、ベルギー、カナダ）とその周辺に位置する劇場やフェスティバルに実際に赴いて、上演作品やテキストを分析し、劇場・フェスティバルの活動を調査し、アーティスト（作家・演出家・振付家・ドラマトゥルク）、劇場関係者、文化政策関係者に対して聞き取り調査を行う。そうして得られた情報・知見を整理しながら、学会やシンポジウムにおける発表を準備し、論文を執筆・投稿し、さらに書籍や雑誌特集を企画・編集することを通じて、研究成果を日本語・英語・フランス語で公表し、広く社会・学界・演劇界に還元する。

4. 研究成果

本研究においては3年間のうちに数多くの成果を上げることができた。クリストフ・トリオー（パリ・ナンテール大学教授）とともに、フランス語圏を代表する演劇専門誌 *Alternatives théâtrales* の特別号 « Scène contemporaine japonaise » の責任編集を担当し、全論考の査読・校閲を担当し、イントロダクションを兼ねた論文を執筆し、日本現代舞台芸術のドラマトゥルギーを包括的に論じた。また、『演劇学論集 日本演劇学会紀要』第66号の特集「ドラマトゥルクとドラマトゥルギー」の責任編集を単独で担当し、4本の論文について査読・助言を行うとともにイントロダクションを執筆した。また、ピーター・エカソル（ニューヨーク市立大学教授）、エド・シア（ニュー・サウス・ウェールズ大学教授）とともに *The Dumb Type Reader* の共同編集を務めるとともに、合わせて論文を執筆・発表した。さらに、分担執筆者として英語の論文集1冊、日本語の論集2冊に参加した。ここまでで、英語の論文2本、フランス語の論文1本が、日本国外で発表されたことになる。これらに加えて、日本語で8本の雑誌論文を執筆・発表した。

日本語および英語で計6回の学会発表を行った。いずれもドラマトゥルギーに関わるものであるが、特にシンガポールにおける2016年の2本の講演はアジア・ドラマトゥルク・ネットワークの創設シンポジウムにおける招待講演であった。

そのほかにも論文のかたちをとらない数多くの研究成果を発表した。本研究を実施する中で数多くの関係者に聞き取り調査を行ったが、その中でもディディエ・フュジリエ、カティア・アルファラ、ダニエル・ジャンヌトー、パスカル・ランベールに対するものはインターネット上に発表されている。また岡田利規、松井周、岩井秀人、タニノクロウ、川口隆夫という5人の日本人アーティストに対してインタビューした結果をまとめた原稿は、上記の *Alternatives théâtrales* の日本特集号に掲載された。

ドラマトゥルギーに関係する翻訳も精力的に行った。ワジディ・ムワドの『岸 リトラル』の戯曲を翻訳し、世田谷パブリックシアターにおける稽古・上演のために、そのドラマトゥルギーを分析した。日本演劇学会が中心となって2019年7月に刊行する予定の『西洋演劇論アンソロジー』においては、アドルフ・アッピア、ジャン・ヴィラール、ジャン・ジュネ、ロラン・バルト、ベルナール・ドルトの論考を選択し、日本語に翻訳し（既訳を用いざるを得なかったバルトを除く）解説を執筆したが、それらはいずれもドラマトゥルギーの概念と実践に深く関わるものであった。

5. 主な発表論文等

単行本（編著書・分担執筆）および学術誌（編集）

分担執筆：山下純照（編）『西洋演劇論アンソロジー』月曜社、2019年7月（刊行予定）

アドルフ・アッピア「我々の演出をいかに改革するか」、ジャン・ヴィラール「公共サービスとしてのTNP（国民衆劇場）」、ジャン・ジュネ「……という奇妙な単語」、ロラン・バルト「ボードレールの演劇」「デイドロ、プレヒト、エイゼンシュテイン」、ベルナルド・ドルト「意識のあり方としてのドラマトゥルギー」「解放された上演」について、演劇論の翻訳（バルトを除く）解説の執筆を担当（査読あり）

分担執筆：Peter Eckersall, Helena Grehan (eds.), *The Routledge Companion to Theatre and Politics*, Routledge, 2019

論文 Shintaro Fujii, "Reflecting upon Freedom with Meiro Koizumi" (pp. 72-76) の執筆（査読あり）

共編著書：Peter Eckersall, Ed Scheer, Shintaro Fujii (eds.), *The Dumb Type Reader*, 2017

全体（269ページ）の編集・校閲、および論文 Shintaro Fujii, "Turning Catastrophe into Art: On Dumb Type, S/N and Tadasu Takamine, *Cool Japan*" (pp. 203-211) の執筆

分担執筆：鈴木理映子（編）『現代演劇のレッスン 拡がる場、越える表現』フィルムアート社、2016年6月

「演劇にとっての環境とは何か」「日本演劇の海外での受容」の執筆（査読あり）

共同責任編集：Shintaro Fujii et Christophe Triau (sous la direction de), *Alternatives théâtrales*, numéro hors-série, « Scène japonaise contemporaine », septembre 2018

全体（80ページ）の編集・査読・校閲、および論文 Shintaro Fujii, « Le Théâtre japonais au prisme des notions de 'public' et de 'privé' » (pp. 5-11) の執筆、岡田利規、松井周、岩井秀人、タニノクロウ、木ノ下裕一、川口隆夫に対するインタビューと原稿作成

責任編集：『演劇学論集 日本演劇学会紀要』66号、日本演劇学会、2018年6月

特集「ドラマトゥルクとドラマトゥルギー」(pp. 1-85) の責任編集・査読、および藤井慎太郎「はじめに ドラマトゥルクとドラマトゥルギーをめぐって」(pp. 1-6) の執筆

論文（いずれも単著）

藤井慎太郎「フランス演劇の2018年 「多様性」をめぐって、再び」、『国際演劇年鑑2019』、国際演劇協会日本センター（ITI/UNESCO）2019年3月、pp. 124-133（査読あり）

藤井慎太郎「舞台芸術のための公的助成制度の新しい潮流」、『地域創造』44号、財団法人地域創造、2018年12月、pp. 68-74（査読あり）

藤井慎太郎「演劇と公共性をめぐる試論 フランスと日本の比較を通じて」、『文学研究科紀要』第63輯、早稲田大学、2018年3月、pp. 399-415（査読なし）

藤井慎太郎「フランス演劇の2017年 安定への兆しのなかで」、『国際演劇年鑑2018』、国際演劇協会日本センター（ITI/UNESCO）2018年3月、pp. 123-131（査読あり）

藤井慎太郎「フランス演劇の2016年 <テロ以後>の舞台芸術の行方」、『国際演劇年鑑2017』、国際演劇協会日本センター（ITI/UNESCO）2017年3月、pp. 111-119（査読あり）

藤井慎太郎「演劇と国境」、『成果報告集 日仏演劇国際シンポジウム「越境する 翻訳・翻案・異文化交流」』、早稲田大学演劇博物館、2017年2月（査読なし）

藤井慎太郎「アンジェ（フランス）の芸術文化環境と複合劇場施設ル・ケの試み」、『地域創造』40号、財団法人地域創造、2016年10月、pp. 63-67（査読あり）

藤井慎太郎「個人的記憶と集合的記憶 ロベール・ルパージュ『887』」、『シアターアーツ』（ウェブジャーナル）国際演劇評論家協会、2016年9月（査読あり）

その他（いずれも単著）

藤井慎太郎「ジャポニスム2018 舞台芸術を振り返って」、国際交流基金『ジャポニスム2018 事業報告書』、2019年3月、p. 27（査読あり）

藤井慎太郎「プレゼンター・インタビュー カティア・アルファラ」、『国際交流基金ウェブサイト』、2018年10月（査読あり）

藤井慎太郎「舞台芸術と「向こう側」2018年のアヴィニオン演劇祭から」、『京都ロームシアター・ウェブサイト』、2018年9月（査読なし）

藤井慎太郎「プレゼンター・インタビュー ディディエ・フュジリエ」、『国際交流基金ウェブサイト』、

2018年6月(査読あり)

- ②1 藤井慎太郎『岸 リトラル』(ワジディ・ムワッド作)上演用戯曲翻訳、世田谷パブリックシアター、2018年3月(査読なし)
- ②2 藤井慎太郎「パスカル・ランベールとジュヌヴィリエ劇場」、国際交流基金『遠近』(ウェブジャーナル)、2017年5月(査読あり)
- ②3 藤井慎太郎「演劇都市 パリ」、『マリアの首』プログラム、新国立劇場、2017年5月(査読なし)
- ②4 藤井慎太郎「プレゼンター・インタビュー ダニエル・ジャンヌトー」、国際交流基金ウェブサイト、2017年4月(査読あり)
- ②5 藤井慎太郎「炎 アンサンディ 歴史と物語」、『炎 アンサンディ』公演プログラム、世田谷パブリックシアター、2017年3月(査読なし)
- ②6 藤井慎太郎「ワジディ・ムアワッドとロベール・ルパージュ 『月の向こう側』から『火傷するほど独り』へ」、『ふじのくにせかい演劇祭』公演プログラム、2016年5月(査読なし)

学会発表(いずれも単著)

- ②7 Shintaro Fujii, "Reflecting upon Freedom with Meiro Koizumi", Performance Studies international (PSi#23), Kampnagel, Hamburg, 8 June 2017
- ②8 藤井慎太郎「演劇の公共性と公共劇場 アングラ世代の演出家の仕事から考える」、国際シンポジウム「アングラ・小劇場の成果と課題」明治学院大学、2016年12月17日
- ②9 藤井慎太郎「演劇と国境 日本とフランスとの関係を中心に」、日仏国際演劇シンポジウム「越境する 翻訳・翻案・異文化交流」早稲田大学、2016年10月26日
- ③0 Shintaro Fujii, "The Human Performer on Trial: The Status of the Actor in Contemporary Performing Arts", Performance Studies international (PSi#22), University of Melbourne, 9 July 2016
- ③1 Shintaro Fujii, "Dramaturg/Dramaturgy and Education", Asian Dramaturgs' Network Inaugural Symposium, Centre 42, Singapore, 24 April 2016
- ③2 Shintaro Fujii, "Some Reflections upon Dramaturg/Dramaturgy", Asian Dramaturgs' Network Inaugural Symposium, Centre 42, Singapore, 23 April 2016

〔雑誌論文〕(計 8 件)

〔学会発表〕(計 6 件)

〔図書〕(計 6 件)

6. 研究組織

- (1) 研究分担者 なし
- (2) 研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。